

彩の歳時記

平成二十二年 五月

唐ころも着つつなれにし 妻しあればはるばる来ぬる 旅にしぞ思ふ

「着馴れた唐衣のように、慣れ親しんだ都の妻を、遙々やって来た、この旅で思うことよ」

平安時代の歌物語『伊勢物語』の九段「東下り」の中で主人公の男が「三河の国八橋」で詠んだ歌。折句（各句のはじめをつなぐと「かきつばた」になる）の手法を駆使した有名な歌で、縁語・掛詞「唐衣、着（来）、なれ慣れ・馴れ・萎れ」、妻（稜）、遙々（張る）、を多用し、修辭法の代表として教科書にも多く採り上げられています。

四年ぶりに根津美術館(表参道)で展示される「燕子花図屏風」は、この歌をモチーフにした琳派の巨匠、尾形光琳【1658～1716】の代表作として名高く、初夏を彩る一品。

五月の異称

皐月・早月 早苗月を語源とする。また入梅時で五月雨月・月見ず月とも。

五月の暦

一日 メーデー(労働者の日) 1886年アメリカ・カナダの労組がシカゴを中心に八時間労働を要求するデモを行ったのが起源。MayDayはヨーロッパの都市中心で催される春の訪れを祝う祭。

二日 八十八夜《雑節》 立春から88日目。「八十八夜の別れ霜」と言われ遅霜の時期。

三日 憲法記念日 (国民の休日)「主権在民」「基本的人権の尊重」「戦争放棄」の三つの柱とする「日本国憲法」施行を記念し、国の成長を期する日。

四日 みどりの日

自然に親しむとともにその恩恵に感謝し豊かな心をはぐくむ日。

五日 こどもの日

こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する日。端午の節句・元は、月の端(はじめ)の午(うま)の日であったが五に掛けて五月五日に。菖蒲の節句ともいわれ、菖蒲と尚武を掛けて男の子の節句に。菖蒲は強い香気で邪気を祓うことから、菖蒲湯に入り「無病息災」を願う慣わしがある。



立夏【二十四節気】 春分と夏至の中間で暦では夏。心地良い風が吹き、晴天が続く行楽に最適。

夏立ちぬ いつもそよげる 樹の若葉 日野草城【1901～1956】

九日 母の日(第二日曜日)

母の日の母のやうなる風の中 黛まどか



二十一日 小満【二十四節気】 秋に蒔いた麦などの穂が付き、一安心(少し満足)する時期。

二十八日 業平忌

平安初期の歌人、在原業平【831～880】の忌日。桓武天皇の曾孫で臣籍に下り在原姓を賜る。六歌仙・三十六歌仙の一人。容姿端麗で情熱的な和歌の名手のため『伊勢物語』の主人公とされる。



ちはやぶる 神代もきかず 龍田川 からくれなるに 水くくるとは

五月の歌

からたちの花 大正十四(1925)年

山田耕柞【1886～19566】と北原白秋【1885～1942】が日本語による日本の歌のために創刊した『詩と音楽』の交友関係から生まれた。からたちは、中国原産で唐橘(からたちばな)が詰まったもの。晩春、甘い香りの白色五弁の花が開く。枳殻と書き『きこく』とも読む。文京区湯島の麟祥院りんしょういんは春日局の菩提寺で生垣がからたち(鋭い刺が外敵の侵入を防ぐ)だったことから「からたち寺」と呼ばれた。



からたちの花が咲いたよ 白い花が咲いたよ。 青い青い針のとげだよ。 からたちは畑の垣根よ いつもいつもとほる道だよ からたちも秋はみのるよ まるいまるい金のたまだよ からたちのそばで泣いた みんなみんなやさしかったよ

